伝統技術の伊賀組紐を用いた地域活性化のための家庭科教材の提案

A18AB055　坂口愛

1．はじめに

日本が世界に誇る数々の伝統工芸品は、各地域特有の郷土の風土と歴史の中で育まれ、地域の人々の日常生活と密接に関係しながら今日まで受け継がれてきた。(図1)

しかし、図2に示したように時代と生活様式、国民の生活用品に対する意識の変化に伴い、伝統工芸品の需要や認識が低迷している。このような背景から、後継者の確保や育成が難しくなっており、衰退していく物も多くみられる。そのため近年の学校教育の中では地域の伝統や文化に触れる機会を多く設けられている。しかしこれらの機会は一時的な取り扱いであり伝統文化の継承という点からは継続的に取り組むことが重要でありより身近に感じられると思われる。

そこで、三重県の地域活性化に着目し伝統工芸品である「伊賀くみひも」を取り入れ、各教育段階のレベルにあった家庭科教材を提案した。さらに技術の伝承、継承に寄与したいと考え「伊賀くみひも」を用いて作品制作を行うこととした。

図1　各地の伝統工芸品の例

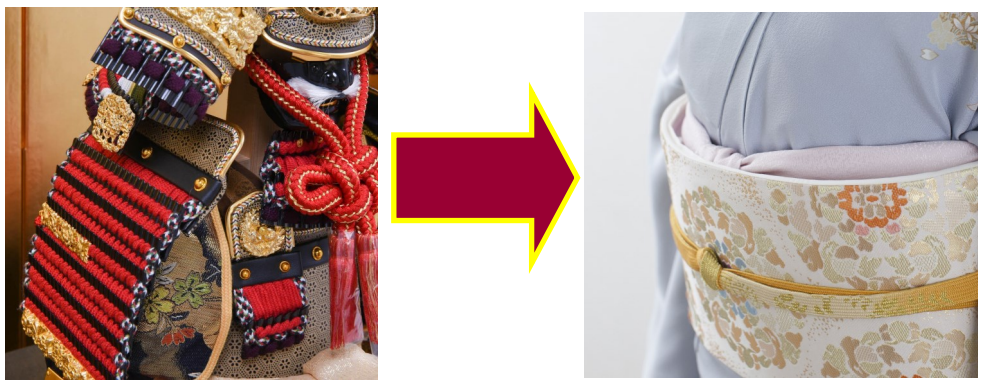


図2　生活様式の変化

2．研究方法

2-1　組紐についての調査

組紐の歴史は古く、奈良時代の仏教の伝来とともに大陸より伝えられたとされているが、紐自体は図1に示したように、縄文土器にもあるようにそれ以前から存在している。大陸からの技術に日本的な洗練さが加わり、その後、主に武具の付属品として使用されるようになり、需要は急増した。また、江戸時代末期には太鼓結帯が流行し、帯留めが用いられるようになり、庶民の中にも浸透していった。

しかし、廃刀令により武具用組紐の需要が激減することとなる。そこで、和装品としての羽織紐・帯締めの製造に転換し、継続されることとなる。現在、組紐は和装品には欠かせず、古来の手法をはぐくみながら、近代感覚に合った優雅な「くみひも」として、私たちの生活の中に根づいている。

① **伊賀くみひも**（図3）：忍者の里として知られる伊賀の地域産業として本格的な発展は、明治中期に広沢徳三郎が江戸の組紐技術を習得し、上野市で開業してからである。伊賀くみひもの特徴は、絹糸に金属糸などを使用し、図4に示したような高台・丸台・角台・綾竹台などの伝統的な組台でつくられる。特に、高台を使用した手組紐が有名であり、全国生産の大半を占め、昭和51年には通産大臣が定める伝統的工芸品に指定されている。

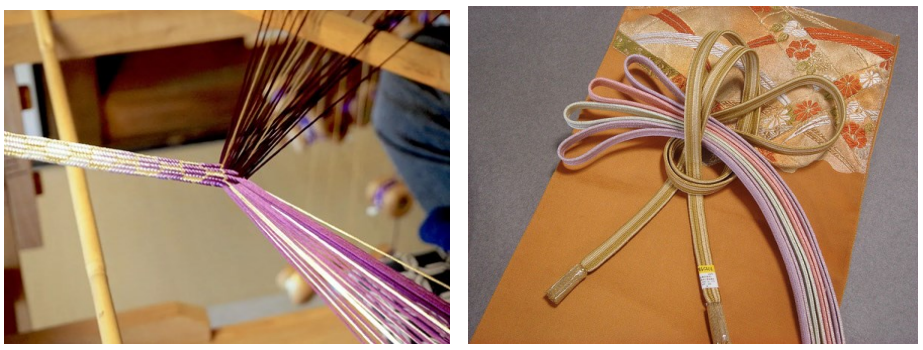


図3　伊賀組みひも

高台　丸台　綾丈台　角台

図4　伝統的な組台

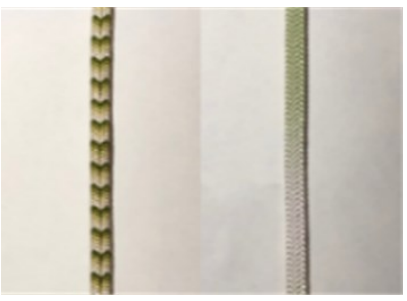
② **京くみひも**（図5）：京都市宇治市周辺で作られている紐であり、古くは平安時代から仏具や神具などの格の高い品に用いられ、皇族や貴族などの装飾品としても使用されたことから都であった京都で発展していった。絹糸等を用いて手作業で美しい編み目の紐に組み上げ、紐の用途によって「平紐」「丸紐」「角紐」「笹波紐」など組み方も様々でその種類は300種にも及ぶ。多種多様な紐の組み上げに必要な道具も様々で紐を組み上げる為に使用する台も用途によって使い分けられている。京くみひもの特徴は、複雑に組み上げられた繊細な編み目と優美な光沢である。

図5　京くみひも

2-2　組紐の組み方と種類

伊賀くみひもの工程は、大きく６工程に分類される。

1.糸割り：製作する組紐の技法、太さ、長さなどにより糸の分量を量りながら使う糸を仕分ける。
2.染色：色見本に合わせてムラなく染め上げる。無地染、ぼかし染、〆切などがある。
3.糸繰り：染色して乾燥させた糸を経尺工程を小枠に巻き取る。
4.経尺：糸繰りされた糸を所定の太さと長さに調整する。
5.撚りかけ：経尺した糸に撚りをかける。
6.組み：糸をおもりとなる玉に巻きつけ組台を使って組み上げる。組み方は数多くあり大きく3つに分けられる。図6に示したような「角組」「丸組」「平組」がありこれを色鮮やかな絹糸で作り出される。



角組

平組

丸組

図6　組紐の組み方

3．家庭科の教材提案及び作品制作

3-1　小学校課程での家庭科教材の提案

小学校での教材は、家庭科の時間数は他の教科と比較すると少ないため、少ない授業時間数の中でも十分に体験できるように考慮した。

教材の例を図7に示したが、ミサンガやキーホルダーの制作を提案したい。これは、授業時間の2時間で完成させることができると考えられる。伝統工芸品を知るきっかけ作りとなり、楽しく作れることを重要視する。

3-2　中学校課程での家庭科教材の提案

中学校課程では、授業時間の2時間で完成させることができるように教材を考えた。図8に示したが、紐の部分に伊賀くみひもを使用したひも付きの巾着袋の制作を提案する。

図7　キーホルダー

図8　ひも付き巾着袋

3-3　高等学校課程での家庭科教材の提案

高等学校教材としては、家庭総合を想定して、ドレスの中に組みこむことにした。制作時間的にドレスが難しい場合は、コサージュなどを制作してもよいと考える。（図9）

本研究での制作は、伊賀くみひもを制作しドレスに活かせるようにデザインを考察した。あくまでも組紐が主体であるため、分かりやすいようにドレスは、シンプルなデザインにした。

梅結び

叶う結び

あわじ結び

図9　コサージュの例

4．作品制作

4-1　ドレスの制作

ドレスの生地はしっかりとしたシルクシャンタンを用いた。くみひも制作では丸台を使用し、様々な色の絹糸と金糸で伊賀くみひもを制作した。また、完成したドレスをボディに合わせ、上から組紐を当て、伊賀組紐の長さ調節やデザインを行い、そのまま手縫いで1つずつ縫いつけた。

4-2　完成作品

完成作品を示した。（図10）

図10　完成図

5．おわりに

本研究では、三重県の伝統工芸品である伊賀組紐に着目し、受け継がれてきた技術の伝承、継承を目的とした。各教育段階に合わせ教材として取り入れることで伝統文化や技術について子どもたちが知り、継承のきっかけとなれば幸いである。

引用・参考文献

１）三重県くみひも協同組合組匠の里

http://www.kumihimo.or.jp